

同範・同型品と考えられる単鳳環頭大刀

菅 博絵

はじめに

古墳時代後期になると、環状の把頭の中に龍や鳳の首を持つ龍鳳環頭大刀を副葬することが盛行する。この龍鳳環頭大刀は、把頭の文様による型式変遷が試みられ、新納泉^(注1)によって変遷の指標が示された^(注2)。その後穴沢味光・馬目順一^(注3)は、新納の編年観を踏襲しつつも、単系列で変化する新納の編年観とは異なり、環内飾りの類似する文様から複数の系列が存在し、変遷することを示した^(注4)。これ以降の研究は、系列の概念を環内飾りの文様だけでなく、外環の走龍文や刀装具などを取り入れた研究がおこなわれる。

穴沢・馬目の設定した系列の中から類似する把頭を

分析すると、外形や、龍鳳文が非常によく似ている資料が確認できる。これらの資料の中には、外形だけでなく外環の厚さの計測値に差がなく、同じ鋳型によって作られた同範品

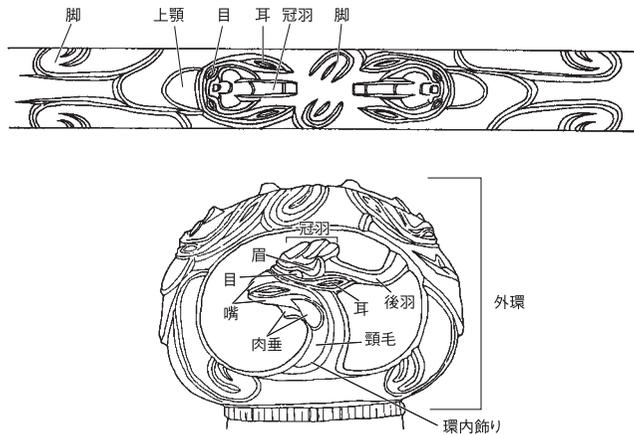


図1 各部名称

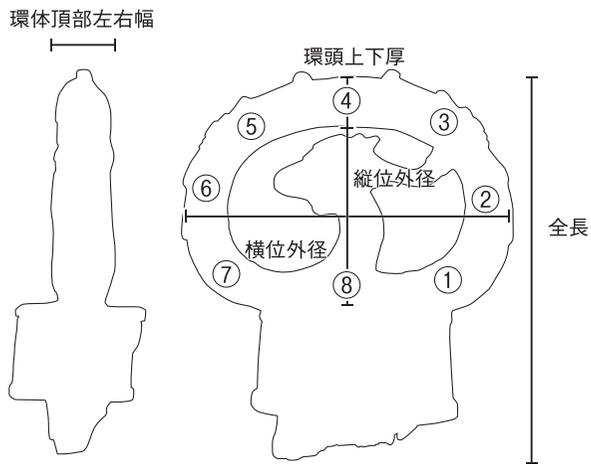


図2 計測位置図

もしくは同じ原型を用いて作られた鋳型からつくられた同型品と考えられる資料が存在す^(注5)る。これまでは単龍鳳環頭大刀は、鋳崩れの状態や複雑な文様構成から蠟型により鋳造^(注6)され、その都度鋳型を破壊してしまうため、同範・同型品はないと考えられてきた^(注8)。しかし茎の側面に鋳型の合わせ目と考えられる型割り線が見られるもの^(注9)や外環に型割り線が見られるもの^(注10)が確認されるようになった。これらのことから、単龍鳳環頭大刀は同範・同型品で作られた資料の存在が明らかとなった。現在、同範・同型品と考えられる資料は145例中8例^(注11)が確認され、その可能性がある資料が9例存在する。同範・同型品の分布を探ることは、環頭大刀の流通を知る上で重要な手がかりになると言える。

本論では、同範・同型品の可能性がある伝・奈良県宇陀郡榛原町出土単龍鳳環頭大刀把^(注13)頭(以降榛原町出土把頭)と伝・山城国乙訓郡出土単龍鳳環頭大刀把頭^(注14)(以降乙訓郡出土把頭)を取り上げる。

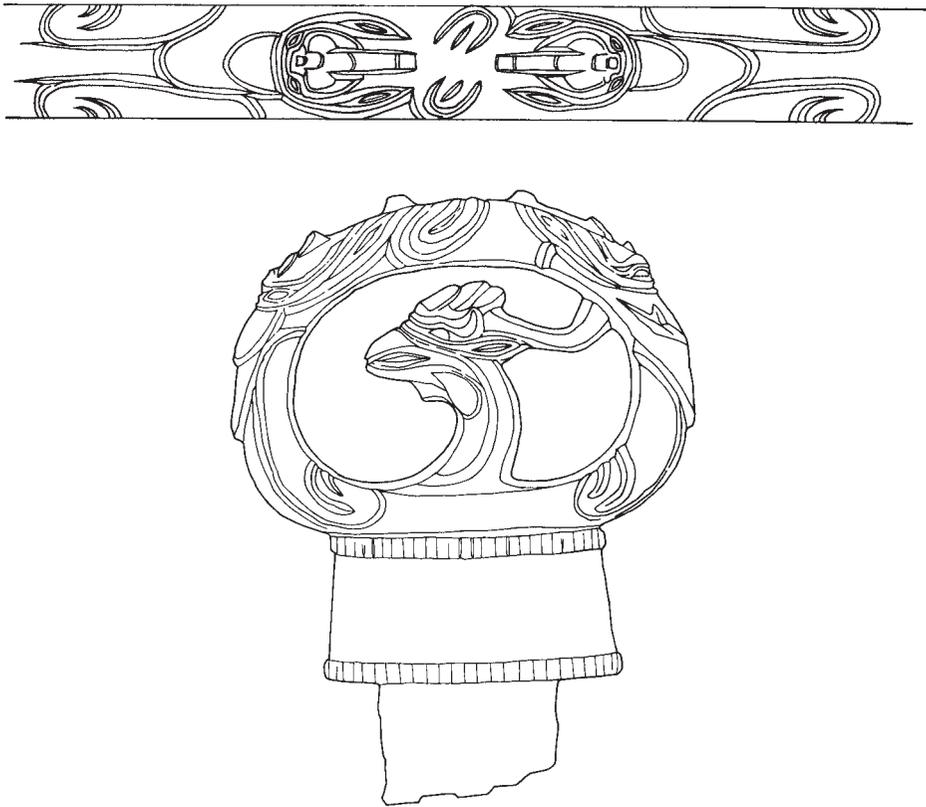


図3 伝・奈良県宇陀郡榛原町出土大刀 上：展開図(3/4)・下：把頭(1/1)



写真1 外環龍顔部鈍角の隆起

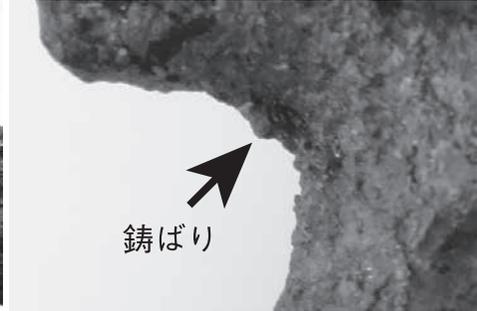


写真2 鳳首頸部の鑄ばり

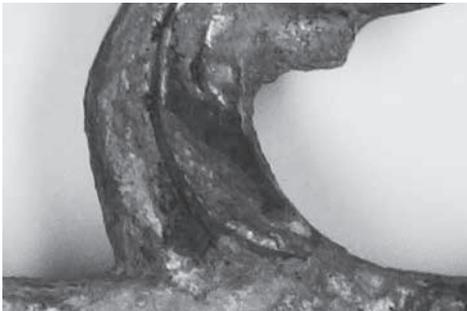


写真3 鳳首頸部の削り



写真4 彫金の痕

1. 伝・奈良県宇陀郡榛原町出土単鳳環頭大刀把頭

京都大学総合博物館に所蔵されているこの単鳳環頭大刀は、外環と環内飾りを一体で鑄造した金銅製の単鳳環頭大刀である。全長76mm、横位外形62mm、縦位外形46mm、環体頂部左右幅10mm、環体上下厚9mmの把頭である。

外環の走龍文は、龍を上からみた左右対称の背中合型^(註15)である。龍の目、耳、上顎が明確に表現されている。上顎は耳へと繋がる箇所と接しており、頭部の冠羽と後羽が立体的に作られている。龍脚の又部から頭部にかけて鈍角の盛り上がりがある(写真1)。龍体に鱗状文はなく、龍脚のみの表現である。龍脚は向かって7時の位置と5時の位置に左右対称に脚がある。12時の位置にある脚は退化し、渦巻き状の文様として表現される。また12時の位置には、本来は2脚ずつあるはずの脚は左右の龍の頭部により圧迫され消失しているため1脚のみの表現である。

環内飾りは1頭の鳳首が肉彫りで表現される。鳳の嘴は閉じており珠を銜えない。頭部にある3本の冠羽は1本1本段で表現され、後方に伸びた後羽は外環に接する。眉は目の後方で巻き上がり、省略は認められない。2本の肉垂のうち頸の上のものは肉彫りで表現される。頸の内側に鑄ばりとみられる突起がある(写真2)。

外環、環内飾りともに大まかな整形を鑄造前におこない、その後彫金によって細かな表

現をおこなっている。整形後丁寧に磨かれているため加工痕はほとんど見られないが、裏面に削りの跡が見られる（写真5）。また合范によって再作された痕跡である型割り線は仕上げの研磨のためか確認できなかった。外環の走龍文や環内飾りの鳳首の文様は彫金である（写真4）。

2. 伝・山城国乙訓郡出土単鳳環頭大刀把頭

八王子市郷土資料館に所蔵されているこの単鳳環頭大刀は、外環と環内飾りが一体で鑄造された金銅製の単鳳環頭大刀である。全長76mm、横位外径62mm、縦位外径45mm、環体頂部左右幅11mm、環体上下厚9mmの把頭である。

外環の走龍文は、龍を上からみた左右対称の背中合型である。龍の目、耳、上顎が明確に表現されている。龍脚の又部から頭部にかけて鈍角の盛り上がりがある（写真5）。左側の龍の上顎は耳へと繋がる稜と接しているが、右側の龍の上顎は耳へとつながる箇所とは接しない。裏側のみ上顎と頭部が繋がる。頭部の冠毛と後羽が立体的に作られている。



図4 伝・山城国乙訓郡出土大刀 上：展開図(3/4)・下：把頭(1/1)



写真5 外環龍顔部鈍角の隆起と削り

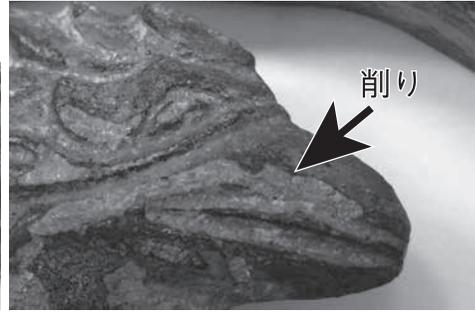


写真6 龍顔部の削り



写真7 外環部の削り



写真8 彫金の跡

龍体に鱗状文はなく、龍脚のみの表現である。龍脚は向かって7時の位置と5時の位置に左右対称に脚がある。12時の位置にあるはずの脚は退化し、半円の文様として表現される。また12時の位置には、本来は2脚ずつあるはずの脚が左右の頭部により圧迫され消失しているため1脚のみの表現である。

環内飾りは1頭の鳳首が肉彫りで表現される。鳳の嘴は閉じており珠を銜えない。頭部の3本の冠羽は1本1本段で表現され、後方に伸びた後羽は外環に接する。眉は目の後方で巻き上がり、省略は認められない。2本の肉垂のうち頸の上のものは彫金で表現されるが、やや隆起している。

外環、環内飾りともに大まかな整形を鑄造前におこない、その後彫金によって細かな表現をおこなっている。環頭部全体は磨かれているが、榛原町出土柄頭と比べるとやや丁寧さに欠け、削りの調整が見られる(写真5・6・7)。合範によって再作された痕跡である型割り線は仕上げの研磨のためか見られなかった。外環の走龍文や環内飾りの鳳首の文様は彫金である(写真8)。

3. 2点の把頭の共通点

次に各部位の計測値を比較していく(表1)。横位外径に差は見られない。縦位外形は



写真9 榛原町出土単鳳環頭大刀頸部

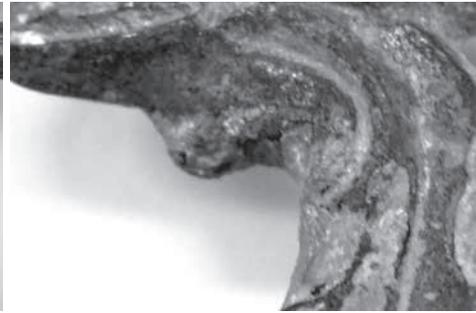


写真10 乙訓郡出土単鳳環頭大刀頸部

付表1 計測値比較表

計測部位	榛原町	乙訓郡	差	
横位外径	62.0	62.0	0.0	
縦位外形	46.0	45.0	1.0	
外形幅	A	9.2	9.4	0.2
	B	7.5	7.8	0.3
	C	7.0	6.3	0.7
外環厚さ	①	9.2	9.4	0.2
	②	10.0	10.3	0.3
	③	9.9	10.2	0.3
	④	10.4	11.0	0.6
	⑤	9.4	10.0	0.6
	⑥	10.5	10.5	0.0
	⑦	10.3	11.3	1.0
	⑧	9.3	9.6	0.3

※ 単位はmm

※ は差が1mm以上のもの



図5 外形比較図

1.0mmの差がある。外環幅では1.0mmを超える差は見られない。外環の厚さでは、⑦が1.0mmの差がある以外は1.0mm以内である。1.0mm以下の差は、乙訓郡出土大刀把頭に削り調整の跡が見られることから整形の際に生じた差であると言える。このように両把頭の外径には大きな差はないと言える。この酷似している両資料の実測図を重ね合わせると、ほぼ合致した(図5)。外環の冠羽や嘴の凹凸、環内飾りの冠羽や肉垂、後羽の形も一致している。

榛原町出土把頭と乙訓郡出土把頭は、外環の走龍文の脚の表現や環内飾りの鳳首の肉垂が肉彫りであるのに対し、彫金で仕上げるなどの差が見られる。しかし、環上の外環の走龍文の頭部が立体的に表現されている点、龍脚の又部から頭部にかけて鈍角の盛り上がりがある点、把頭の外見が非常に酷似している。これら2点の資料は、その意匠の類似性が

ら同一の工人による作品であることが指摘されている。^(注16)

外環の走龍文や顔面表現の差は鑄造した後、彫金によって施されるための差であると考えられる。頸毛の表現は鑄上がりの状態や範の消耗によって立体感が消失したためであろう。

おわりに

両大刀把頭とも鑄造後丁寧に研磨され鍍金されていたため、明確な型割り線を見ることはできなかった。しかし榛原町出土把頭には、鑄ばりと考えられる突起があることから、合範によって作られた可能性があると言える。今回2点の環頭大刀把頭の比較検討をおこなった。その結果、2点の大刀把頭の外形に大きな差は見られなく、厚さにおいても差は見られなかった。このことから、これらの環頭大刀把頭は、同範品もしくは同型品であると考えられる。

上記で述べた通りこの2点の環頭大刀把頭は同範・同型品の可能性が高いが、これらの資料が発掘調査で出土した資料でないことも考慮しなければならない。そのため今後は肉眼観察だけでなく、科学分析による検証が課題である。

謝辞

資料調査では八王子市郷土資料館、京都大学総合博物館の各機関とそのご担当者の方にお世話になりました。記して感謝申し上げます。

(すが・ひろえ = 当調査研究センター調査課調査員)

注

- 注1 穴沢味光・馬目順一「龍鳳文環頭大刀試論－韓国出土例を中心として－」(『百済研究』第7輯 忠南大 忠南大 百済研究所)1976、pp.229-263
新谷武夫「環状把頭研究序説」(『考古論集 慶祝松崎寿和先生六十三歳論文集』松崎寿和先生退官記念事業会)1977、pp.271-312
- 注2 新納泉「単竜・単鳳環頭大刀の編年」(『史林』第65巻 第4号 史学研究会)1982、pp.110-145
- 注3 系列は「環内の龍や鳳の頭と環上の文様の類似による型式学的な前後関係にある環頭大刀の把頭の序列」である。穴沢味光・馬目順一「単龍・単鳳環頭大刀の編年と系列－福島県伊達郡保原町愛宕山古墳出土の単龍環頭大刀に寄せて－」(『福島考古』第27号 福島県考古学会)1986、pp.1-22
- 注4 橋本英将「外装から見る装飾大刀」(『第9回鉄器文化研究会 鉄器研究の方向性を探る 刀剣研究をケーススタディとして』鉄器文化研究会)2003、pp.131-176

大谷晃二「龍鳳文環頭大刀研究の覚え書き」『財団法人大阪府文化財センター・日本民家集落博物館・大阪府立弥生文化博物館・大阪府立近つ飛鳥博物館2004年度共同研究成果報告書』財団法人大阪府文化財センター)2006、pp.145-164

持田大輔「含玉系単龍鳳環頭大刀の検討－日本列島および朝鮮半島出土例より－」(『比較考古学の新天地』同成社)2010、pp.413-422

注5 注4に同じ。

注6 増田精一「鞍作部の系譜」(『古墳と神々』日本文化の歴史2 古墳時代 学習研究社)1969、pp.194-199

注7 金 跳咏「大伽耶 龍鳳文環頭大刀の外環製作方法と復元実験」(『文化財と技術』第5号 工芸文化研究所)2012、pp.43-53

注8 注4に同じ。

注9 注4に同じ。

注10 注4、注7に同じ。金 宇大「装飾付環頭大刀の技術系譜と伝播－朝鮮半島南部出土資料を中心に－」(『古文化談叢』)2011、pp.87-127

注11 菊池芳朗「1. 単龍・単鳳環頭大刀」(『古墳時代環頭大刀終生』大阪大学大学院文学研究科)2014 を参照した。

注12 大谷晃二「龍鳳文環頭大刀研究の覚え書き」『財団法人大阪府文化財センター・日本民家集落博物館・大阪府立弥生文化博物館・大阪府立近つ飛鳥博物館2004年度共同研究成果報告書』財団法人大阪府文化財センター)2006、pp.145-164

注13 小野山節ほか編「近畿地方」(『京都大学文化財部博物館考古学資料目録』第二部 日本歴史時代 京都大学文学部)1868、p.148

注14 穴沢味光・馬目順一「井上コレクションの単鳳環頭大刀把頭」(『井上コレクション 弥生・古墳時代資料図録』言叢社)1988、pp.242-246

注15 龍を上から見た左右対称の走龍文。穴沢味光・馬目順一「単龍・単鳳環頭大刀の編年と系列－福島県伊達郡保原町愛宕山古墳出土の単龍環頭大刀に寄せて－」(『福島考古』第27号 福島県考古学会)1986、pp.1-22

注16 注12と同じ。

図版出典

図1 新納(1982)からトレース、筆者作成

図2・5 筆者作成

図3 新納(1982)からトレース

図4 穴沢味光・馬目順一(1988)からトレース

表1 筆者作成

写真については筆者撮影